

第40回国民文化祭、第25回全国障害者芸術・文化祭
「ながさきピース文化祭2025」佐々町地域文化発信事業

—— シンポジウム ——

市の瀬窯跡と加藤民吉

～佐々から瀬戸へ～



【懐き柏向付五客揃】
伝加藤民吉（初代） 江戸時代後期（19世紀前期）
個人蔵



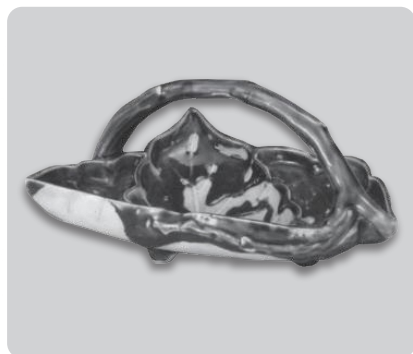
【染付祥瑞捻文皿】
加藤民吉（初代）
江戸時代後期（19世紀前期）
瀬戸蔵ミュージアム蔵



【染付祥瑞捻文猪口】
加藤民吉（初代）
江戸時代後期（19世紀前期）
瀬戸蔵ミュージアム蔵



【染付山水図蓋物】
享和3年（1803）
瀬戸蔵ミュージアム蔵



【瑠璃釉重柏葉手鉢】
伝加藤民吉（初代）
文化年間（1804-1818）
瀬戸蔵ミュージアム蔵



【染付山水図耳付花瓶】
江戸時代後期（19世紀前期）
瀬戸蔵ミュージアム蔵



【染付山水図水指】
江戸時代後期（19世紀前期）
瀬戸蔵ミュージアム蔵

◆ 加藤民吉について

加藤民吉は、江戸時代中期の明和8年（1771年）、加藤吉左衛門の次男として、尾張国瀬戸村（現在の愛知県瀬戸市）に誕生しました。平安時代から続く陶器の産地である瀬戸ですが、民吉が生まれた当時は肥前磁器の台頭など様々な要因で経営が苦しい窯屋も増えていました。

瀬戸においても尾張藩の支援を得て、瀬戸村庄屋加藤唐左衛門や民吉の父兄を中心に磁器焼成に取り組んでいましたが、肥前ほど美しいものは作れませんでした。

結局誰かを肥前に差し向けて磁器の製法を学ばせる他はないとなり、民吉に白羽の矢が立ったのです。民吉は文化元年（1804年）2月22日瀬戸を出立、曹洞宗の寺を足掛かりに歩みを進め、天草、三川内を経て文化元年（1804年）12月28日、市の瀬皿山福本仁左衛門窯に入りました。

約2年余りの滞在で目的を果たした民吉は文化4年（1807年）6月18日、瀬戸村に帰村、習得した技法を伝えると、瀬戸の磁器の品質は飛躍的に向上しました。民吉は死後、その功績が認められ、窯神社に『磁祖』として祀られています。

今回のシンポジウムでは、瀬戸焼の磁祖である加藤民吉と修業した地である市の瀬窯跡をテーマに、瀬戸市美術館学芸員による講演会のほか、本町の郷土史家、陶芸家を交えたフリートークや瀬戸市所蔵の加藤民吉作品の展覧会および作品解説（ギャラリートーク）を行い、加藤民吉の偉業と、ゆかりの地『佐々』と民吉との関わりを発信します。

【主 催】文化庁/厚生労働省/長崎県/第40回国民文化祭、第25回全国障害者芸術・文化祭長崎県実行委員会/佐々町/佐々町実行委員会